

学校園教育推進サポート事業 報告書

学 番	1313	学校名	上所小学校	校長名	吉田 亨	作成者名	本間 直樹
学校教育推進サポート担当者名		本間 直樹				電 話	283-7258

1 実践のテーマ

学習の基盤となる情報活用能力の育成

2 テーマ設定の理由

当校では昨年度より、研究主題「学びを生かす子どもの育成～情報活用能力を育む授業づくり～」の下、児童が情報活用能力を発揮しながら「深い学び」を具現する授業を目指し、校内研修に取り組んでいる。令和5年度は、本研究における「情報」及び「情報活用能力」を定義付け、児童の情報活用能力を発揮させるための指導方法を探ったり、愛媛大学と連携したカリキュラム開発に取り組んだりした。

令和6年度は、「学習の基盤となる情報活用能力の育成」を目標に掲げた校内研修を継承しつつ、これまで取り組んできた全学年の交換授業（国語と算数）に加え、高学年において特定教科担任制を推進することにより、新たな体制で各教科における目指す児童の姿を具現することを目指し、テーマを設定した。

3 実践内容

(1) 校内研修の推進と教育研究発表会の開催

① 校内研修の推進

- ・全教職員による研究授業を通して、目指す児童の姿になるための指導の方策を探る。  
授業者は、「情報を整理する」場面に焦点を当て、児童がどのような「考えるための技法（思考技能）」を働かせるかを意識しながら、働き掛けを構想する。児童が情報活用能力を発揮しながら「深い学び」に向かう姿を目指す。

<目指す児童の姿>

情報を比較、分類、整理しながら、相互に関連付けて再構成したり、それらを  
(情報活用能力を発揮している姿)

精査したりして、自分の考えを形成する姿  
(各教科等における「深い学び」の姿)

- ・ICTの利活用に係る取組を教職員間で共有し、日々の授業におけるタブレットの効果的な活用の仕方を探る。
- ・愛媛大学と連携し、情報活用能力と学習内容・学習活動とを関連付けた「情報活用能力育成カリキュラム」を開発する。

② 「学びの上所小」教育研究発表会の開催

- ・令和6年11月23日（土）に「学びの上所小」教育研究発表会を開催し、本研究の成果を発表し、参会者からの批評や意見に答える。

(2) 高学年における特定教科担任制の促進

5年生、6年生において、これまでの交換授業を一步進め、国語、算数、理科、社会、音楽、図工等の特定教科担任制を推進する。

- ・5年生を3クラス、6年生を4クラスに編成する。
- ・国語、算数、理科、社会、音楽、図工等の特定教科担任を決め、特定教科担任が5・6年生の指導を行う。
- ・5・6年生の学級担任の負担を減らし、教材研究の時間を確保するため、一人当たりの授業時数が20～23時間程度になるような運用を目指す。

#### 4 実践計画

実施時期	実施内容 (研修会、先進校視察、授業公開 等)
通年	・ 5年生, 6年生における特定教科担任制の推進
〃	・ 研究内容に基づく研究授業の実施 (第1クール～第4クール)
〃	・ ICTの利活用に係る情報交換
8月	・ 愛媛大学と連携したカリキュラム開発に向けた研修①
11月23日(土)	・ 「学びの上所小」教育研究発表会の開催
	・ 本研究のまとめ (成果と課題)
12月	・ 愛媛大学と連携したカリキュラム開発に向けた研修②
1月	・ 教育評価アンケートの実施と分析

#### 5 成果

320名の参加者を迎え、午前には、研究概要説明(授業と説明)を志田教諭が行った。その後、1年佐々木教諭の体育、2年中澤教諭の国語、4年梶山教諭の社会、5年三原教諭の算数の公開授業を行い、体育には筑波大学附属小の眞榮里先生、国語には富山国際大の岩崎講師、社会には関西学院初等部の宗實教諭、算数には筑波大学附属小の田中教諭を指導者に迎え協議会を行った。



【志田教諭による授業】



【1年体育の公開授業】



【5年算数の協議会】

午後からは、「公立小学校の3つのチャレンジ」と題した上所小が独自に取り組んでいる「働く環境づくり」「高学年教科担任制」「デジタルシティズンシップ教育」についての発表をした。その後、筑波大学附属小学校の眞榮里教諭による体育、富田教諭による理科、田中教諭による算数、関西学院初等部の宗實教諭による社会、富山国際大学の岩崎講師による国語の出前授業、授業後には5名の皆様より授業解説をしていただいた後、筑波大学附属小学校の佐々木校長、当校の吉田校長、志田教諭による鼎談を行った。



【富田教諭による出前授業】



【宗實教諭による出前授業】



【佐々木校長との鼎談】

研究主題である「学びを生かす子どもの育成～情報活用能力を育む授業づくり～」について、上述の内容で提案し、多くの講師より指導講評を受けたり、大勢の参加者より感想や意見をいただいたりしたことにより、これまでの研究より得た知見の妥当性や成果と課題を明らかにすることができた。本事業による助成とサポートのおかげであると深く感謝している。